

呪歌の精・遊宴の花（承前）

——額田王論（二）

緒方惟章

二 卷第一・雑歌部所載の王作歌

（三）△呪歌の精・額田王▽（一）

——C歌を續つて

額田王の歌

熟田津^{ニキタツ}に船乗りせむと月待てば潮^{シホ}もかなひぬ今は漕ぎ出でな（1ー8）

右、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく、飛鳥岡本宮^{アスカノオカモトノミヤ}に天の下知らしめしし天皇の元年己丑、九年丁酉の十二月己巳の朔の壬午、天皇太后^{オホキサキ}、伊予の湯の宮に幸す。後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、御船西征して始めて海路に就く。庚戌、御船、伊予の熟田津の石湯^{イハユ}の行宮^{カリミヤ}に泊つ。天皇、昔日^{ムカシ}より猶ほし存れる物を御覽^{ミシコナハ}し、当時^{スナハチ}忽感愛の情を起す。所以に歌詠^{ツツ}を製りて哀傷したまふといへり。すなはちこの歌は天皇の御製^{オホミツク}そ。ただし、額田王の歌は別に四首あり。

C歌(1-18)の作者・作歌の事情を確定させんが為の作業は、C歌に付随する左註の検討を通して進められねばなるまい。この左註の内容には甚だしい錯綜が見られるのであるが、いま、それを整理すれば、次の三部に区分することが出来よう。即ち、第一部・第二部を括る、「右、山上憶良大夫の『類聚歌林』を検ふるに曰はく、……といへり。」なる形式を外すとき、その第一部の内容は、

飛鳥岡本宮に天の下知らしめしし天皇(舒明天皇——註筆者)の元年己丑(六二九)、九年丁酉(六三八)の十二月己巳の朔の壬午、天皇太后(後に皇極・斉明天皇として祚を踐む——註筆者)、伊予の湯の宮に幸す。

ということになる。これは、若き日の二度に亘る夫・天皇との伊予の湯の宮への行幸(行啓)の事実を記し、以て第二部における斉明天皇の感愛・哀傷のその前提を示さん、との意図に発するものである。さて、その第一部に続く、第二部は、

後岡本宮に天の下知らしめしし天皇(斉明天皇——註筆者)の七年辛酉(六六一)の春正月丁酉の朔の壬寅、御船西征して始めて海路に就く。庚戌、御船、伊予の熱田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶ほし存れる物を御覽し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふ。

と記すのであつて、斉明七年、百濟救援の為軍船を西に進める途次の、緊張のその最中であつて、それ故にこそなお、老いたる女帝は、滞留した伊予の熱田津の石湯の行宮に、昔日のその倂を今に留める風物をご覧になつて懷旧・感愛の情を発し、顧みて、そのかみの日には共に在つた夫君の今はこの世の外なることを哀傷し給うた、と『類聚歌林』説を提示するのである。問題を遺すのは、次なる第三部である。

すなはちこの歌は天皇の御製そ。ただし、額田王の歌は別に四首あり。

第三部は、さように記すのであるが、甚しく奇異の思いを抱かしむる内容である、と言えよう。即ち、第一部・第二部における『類聚歌林』の主張をさながら容れ、C歌の発想の何処からも感愛・哀傷の響きを聴取しえぬに拘らず、「すなはちこの歌は天皇の御製そ。」と断定しているところに、奇異の思いを抱かしむる第一の点が存するのであり、また、「ただし、額田王の歌は別に四首あり。」と言ひ切りながら、その四首を何ら示しておらぬところに、その第二の点が存するのである。

然るが故に、金子元臣氏『万葉集評釈』の如き錯簡説などの提起せられるところともなるのである。併しながら、かかる立場は、また余りに極端に過ぎよう。ここに、我々は、桑川定一氏の注目すべき説に触れ合うことになる、『国語・国文』第二巻第三号所収の、「『焚

田津』の歌の作者に就いて」の論がそれである。万葉集卷第三所収の赤人へ伊予温泉作歌（三二二・三二三）についての、『仙覚抄』の次なる記述、

山部宿祢赤人至伊予温泉ノイテユニ 一作歌詞中

伊予能高嶺乃射狹庭乃崗イヨノタカネノイサニハノヲカト云ヘルコト 伊与国風土記（桑川氏は、これを、和銅の勅による初度の勘進によるものではなく、その散佚後に、恐らくは、神龜元年（七二四）または神龜三年（七二六）以後の勘進に従うものである、とされる。——註筆者）云。湯郡、天皇等、於湯ニミユキ 幸行降坐五度也。（中略）立湯岡側碑文ノニ、其立碑文一處、謂伊社途波之岡フイサニハノヲカト 一也。所名伊社途波ヲクル 一由者、当土諸人等其碑文欲見タウトノ 而、伊社那比来因謂伊社途波ニ、本也云々。以岡本天皇、并皇后二軀為一度ト。于時於大殿戸ニ 有二椀与臣木トガトモモシキ。於其木一、集止鴈イカルカト 与此米鳥一。天皇為此鳥一、枝繫穂等、養賜也。以後岡本天皇、近江大津宮御宇天皇、淨御原宮御宇天皇、三軀為一度。此謂幸行五度一也。臣木毛生繼尔家里、臣木可尋之。

反歌

百式紀乃大宮人之飽田津モ、シキノオホミヤヒトノニキタツニフナノリシケン 船乗將為年之不知久ントシノシラナク

ニキタツ、日本記第廿六卷ニハ、天皇七年春正月丁酉朔庚戌、御船泊于伊予熟田津ノニキタツ 石湯行宮カリミヤニ 一、熟田津此云伊予国風土記ニハ、後

岡本天皇御歌曰、美枳多頭尔波豆丁ミキタツニウチテ、（桑川氏は「波豆丁」とされる——註筆者）美礼婆ミレハ 云々。

を踏まえて展開される、桑川氏の論の大概を箇条的に示せば、以下のごとき内容となる。即ち、(1)もし、「熟田津」（C歌Ⅱ1-18）が御製であれば「伊与国風土記」に載せられたと思われ、さすれば『仙覚抄』がこれを引用した筈であるが、このことが無いところよりすれば、これは御製ではないのであろう。(2)同一人が同一場所で同一地名を詠んで、一方が「美枳多頭」で他が「熟田津」であるということは考えられず、その点からも、「熟田津」の作を齊明御製と見ることは出来ぬ。(3)赤人へ伊予温泉作歌の反歌「百式紀乃」（3-133）は、「伊与国風土記」に基づき詠んだとは見られず、万葉の「熟田津」の詠（C歌Ⅱ1-18）を本歌とするものであろう。既に「熟田津」は額田王作であるという前提の下にこの「百式紀乃」の反歌が詠じられたとすれば、そこに詠じられる「大宮人」なる詞中に額田王その人を含めることが出来よう。(4)「伊与国風土記」に見える、御製「美枳多頭」は、下句を欠くが故にその内容を確定

することをえぬが、なお、「美枳多頭に泊てて見れば、昔背の君におはす天皇と共に眺めやつた風物は、宛然当時のままであるのに、独り天皇のみ此の世にましまさぬが哀しいことである」という趣であつたかと想定される。——斯く論じた後に、糸川氏は、想像される憶良「類聚歌林」の原形を

美枳多頭爾 波弓丁見礼婆_{云々}

飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑、九年丁酉十二月己巳朔壬午、天皇太后、幸于伊予湯宮_一。後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅、御船西征、始就于海路_一、庚戌御船泊于伊予熨田津石湯行宮_一。天皇御覽昔日猶存之物_一、當時忽起ニ感愛之情_一、所以因製ニ歌詠_一為_レ之哀傷也。

熨田津爾 船乗世武登 月待者 潮毛可奈比沼 今者許芸乞菜

額田王歌

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

とし、その「美枳多頭」詠の左註が「熟田津」詠（C歌Ⅱ1―18）の題詞と、また、その「熟田津」詠の左註が内容の今に伝わらぬ四首の題詞と、それぞれ見過られた結果が、当面する万葉集C歌左註の実体であつた、とされるのである。この論に誘起される形で、諸家の論が展開されることになる。以下、それら諸論を紹介しつつ、私見を併せ開陳することとしたい。

前掲の糸川氏説に対して、沢瀉久孝氏は、「左注の所謂『為之哀傷也』の語に対する不審をきれいに処置された新見であるが、左注の筆者の誤読によるとする仮定に難がある。」として、箇条的に記せば以下のごとき内容の別案を提示されるのである。⁽¹⁾即ち、先ず、糸川氏説に対する批判としては、(1)糸川氏は御製ならば風土記（仙覚抄）所載の「伊与国風土記」。以下「沢瀉考」中の「風土記」、これに同じ。——註筆者）に載せられた筈とされるが、風土記は歌集でなく名作を一々採録したものでないから、それは論拠とはならぬ。(2)ミギタツとニギタツとのことは、「類聚歌林」に「美枳多頭」と書かれていたとは決められない。風土記に伝誦の訛をその儘書き下しに

して記載したと見ることが出来る。(3)赤人の作(ハ伊予温泉作歌^ノの反歌^ニ3-3-3——註筆者)は額田王の作(C歌^ニ1-1-8——註筆者)に追和したとも見られるが、赤人の時代には既に万葉集の巻第一、巻第二——少なくともその原本——は出来ていたのだから、赤人はそれに依ったもので、『類聚歌林』や風土記に依ったものではないから、C歌(1-1-8)そのものの作者決定の参考にはならない。

——の三箇条を挙げられ、次いで、(4)『類聚歌林』には、齐明天皇の御製として、(一)「熟田津爾泊而……」・(二)「熟田津爾舟乗……」の二首または数首が載せられていた。その中(一)は風土記に載せられたもので、(二)は万葉集に載せられたものであった。(5)無論、万葉集原本の採録者は『類聚歌林』からではなく「額田王作」とあった記録から採ったのであるが、『類聚歌林』には別の記録によって(一)と(二)と共に「齐明天皇御製」として並べ載せられていたのである。(6)(一)の作は糸川氏の解のごときものと思われ、C歌左註の「哀傷^{云々}」は主としてこの作に関するものと思われるが、万葉集のC歌左註者が、(一)の採られていない万葉集に、『類聚歌林』の左註の全文を不用意に引用した為に、「哀傷^{云々}」が不審として残されることになったのである。——以上のごとく説かれ、糸川氏に倣って、『類聚歌林』の原形を、

(一)熟田津爾泊而……

(二)熟田津爾舟乗……

(三)……………

飛鳥岡本宮……

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

右額田王作

と想像しておられるのである。

糸川氏説・沢瀉氏説を勘案しつつ、谷響氏の説かれるところは以下のごとき内容である。即ち、(1)万葉集巻第一における諸歌左註の

「類聚歌林」引用の方針・態度を窺うに、左註者は、歌の製作事情を明らかにしようとする強い欲求から、当の作歌とは別の、唯その事において関連を有する「類聚歌林」所収歌に付されていた文を参考・引用・註記することの稀でなかった、その事実を知るところとなる。

(2)その事実を考慮に入れて読むならば、C歌(1-18)の左註も亦、製作の時処を明らかにする目的で「類聚歌林」の文を引用・註記したものと思われ、そのC歌とは全く別の歌について書かれていた「類聚歌林」の文とは、「……即此歌者、天皇御製焉。」迄と考えられる。(3)さように考えるのであれば、これも重んずべき資料に拠った万葉集の左註者が、この憶良の文を証として、少しも「哀傷」の情の認められぬC歌に対して、「即此歌者、天皇御製焉。」と、断定的な註を添える理由など全く認められぬからである。(4)同時にまた、C歌の左註者は、「類聚歌林」の同所に額田王の作品がC歌の他に四首も載っていることを重視して、「但額田王歌者、別有四首一。」と註記したのである。——斯く論じて、谷氏は、糸川・沢瀉両氏に倣って、憶良「類聚歌林」の原形を

美枳多頭爾……

飛鳥岡本宮……天皇御製焉

熟田津爾……

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

額田王作歌焉

のごとき形態であつたか、と想像しておられるのである。

以上三氏の論攷に導かれつつ、筆者も些か私見を申し述べることにしたい。

先ずは、糸川説に対する疑点より記すことになるのだが、実は、糸川氏の論ずる(1)～(3)の各条については、逐一、沢瀉氏が駁説を示しておられるところでもあるので、便宜、両氏の説を重ね合わせつつその可否を見極め、次いで、糸川説に対する筆者の疑点を提示することとしたい。先ず、(1)の検討から始めよう。糸川氏の説かれるところは、もしC歌(1-18)が御製であれば「伊与国風土記」に

載せられ、『仙覚抄』に引用された筈であるが、このことが無いところよりすれば、これは本来御製ではなかったのだろう、というもので、対して、沢瀉氏は、風土記は歌集でなく名作を一々採録したものではないから、「伊与国風土記」にC歌が載せられていなかったとしても、そのことはC歌が御製であったことを否定する論拠とはなるまい、とそれを批判されるのである。この点如何——。一般論としては、沢瀉氏の立場は首肯しうところであるが、この場合に限定して考えれば、その立場には従いかねるものである。何故となれば、「斉明紀」の記載に照らしても、斉明天皇の伊予国行幸は七年辛酉（六六一）春正月のそれ、唯一度のみであり、その石湯の行宮（イハユ）ご滞留期間中の御製は御製なるが、故に、恐らく一括して録せられていたであろうことを思えば、沢瀉氏の説かれるがごとく、C歌が斉明天皇の御製であれば、C歌も「美枳多頭尔」詠も同一資料に並び録せられていた筈であり、その場合、風土記編纂に際しては必ずや資料の博搜に努めたに相違無い「伊与国風土記」の編者が、万葉集にも収められたC歌を殊更に捨て「美枳多豆尔」詠唯一首のみを採るということは、甚だ不可解と言うの他はないからである。然も、沢瀉氏は、(5)の条において、C歌を「額田王作」とする記録の存したことを言われるのであるが、C歌が真実御製であったなら、前述のごとく直ちに記録せられたであろうに相違無く、その場合、如何に高名の歌人であろうとも、額田王をしてその作者とする伝えの生ずる謂われは存せぬものと思われるのである。次に、(2)の検討に移る。条川氏は、同一人が同一場所で同一地名を詠んだ場合一方が「美枳多頭」で他が「熟田津」であるということは考えられず、その点から「熟田津」の作（C歌）を斉明御製とは見做し難い、とされるのであり、対して、沢瀉氏は、『類聚歌林』に「美枳多頭」と書かれていたとは決められぬ。「伊与国風土記」は伝誦の訛をその儘書き下しにして記載したと見られる、とされるのである。この点については如何——。結論より言えば、沢瀉説には従いかねるのである。即ち、仮に沢瀉氏の言われるがごとく「美枳多頭尔」詠が伝誦されたものであったとしても、その過程に生じたとされる、現地の地名と相違する「美枳多頭」なる訛伝が、現地で編纂された「伊与国風土記」の編纂者に容認され、訛伝の儘「伊与国風土記」に採られるということは考え難いからである。「熟田津」はまた「美枳多頭」とも称されたのであり、C歌はその中「熟田津」の称に従い、一方「美枳多頭尔」の詠は「美枳多頭」の称に従ったもの、と想像される。そうであれば、条川氏の説かれるがごとく、C歌の作者は「美枳多頭尔」詠の作者たる斉明天皇とは相異なる人物、ということになろう。最後に、(3)につき検討してみよう。実は、これについては、条川氏の論ずるところも些か曖昧であり、それに対する沢瀉氏の論も条川説と殆ど噛み合うところの無いものであつて、必ずしもここに取り上げて論ずるの要無きものとも思われるのであるが、両氏の論ずると

ころからこの点のみを除去するのにもまた適當を欠くようにも思われるので、一応ここに記すこととする。桑川氏の言われるところは、次のごとくである。即ち、赤人の△伊予温泉作歌Vの反歌(3-3-3-3)は、「額田王作」であると理解したC歌をその本歌として詠じられたものであつてみれば、そこに見える「大宮人」なる詞句の中には額田王その人を含めることが出来よう、というものである。それに対する沢瀉氏の諸説は以下のごとき内容である。即ち、赤人の△伊予温泉作歌Vの反歌(3-3-3-3)は額田王の作たるC歌に追和したとも見られるが、赤人の時代には既に万葉集の巻第一、巻第二の少なくともその原本は出来ていたのだから、赤人はそれに依つたもので、「類聚歌林」や「伊与国風土記」に依つたものではないから、C歌そのものの作者決定の参考にはならない、というものである。この点については如何——。前にも一言したごとく、桑川氏の説かれるところも甚だ曖昧であるが、一方の沢瀉氏の所説は曖昧である以上に不可解である。桑川氏はC歌が額田王の作であることを証せんとするのであり、対して沢瀉氏はC歌が斉明御製であることを明らかにする立場であつた筈だ。然るに、沢瀉氏の(3)の主張は、「額田王の歌」なる題詞の下にC歌を載せる万葉集巻第一の原本に依り赤人の△伊予温泉作歌Vの反歌(3-3-3-3)は作製せられたのであるから、C歌の作者は誰人であつたか決定しかねる、という奇妙な内容であるのだ。沢瀉氏説は容認しえぬところである。

以上、桑川氏説の三箇条とそれを批判する沢瀉氏説の三箇条とを対比してみたのであるが、これ迄の部分においては、桑川氏の説は沢瀉氏の批判に耐えうるものであることが明らかになつたのである。然らば、桑川氏説は何らの瑕無き万全の説と称することをうるものであるのか。否。筆者は、以下に示すがごとき点において、桑川氏説は最終的には否定されねばならぬものとする次第である。桑川氏説に対して筆者が疑念を禁じえぬ所以のものは、氏の想定に係る憶良「類聚歌林」の原形とそれについての万葉集C歌左註者の誤解という、謂わば氏の論の根幹に相当する部分に関わるのである。憶良「類聚歌林」の原形に関しての疑念より申せば、その第一は、「熟田津爾」の詠(C歌)に付されたその作者に関わる左註の内容が単に「額田王歌」でありうるか、という点である。それがもし「右額田王作歌」という形であつたなら、如何に迂闊な万葉集C歌の左註者であろうとも、それを内容の今に伝わらぬ四首の詠の題詞と誤ろう謂われは無いからである。その第二は内容の今に伝わらぬその四首の詠にはその作者を示す何らの左註も付されていなかったとするのは余りに不自然である、という点である。この場合も、もしその四首の詠にその作者を伝える左註が付されていたものとするれば、如何に粗忽な万葉集C歌の左註者と雖も、「額田王歌」をしてその四首の詠の題詞と思ひ誤る筈は無いからである。次に、万葉集C歌左

註者の誤解という考えに対しての疑念を申せば、「美枳多頭爾」詠の左註が「飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑……所以因製ニ歌詠一為レ之哀傷也。」であったとして、先ず、それだけの長文に互る左註を万葉集C歌の左註者が直ちに「熟田津詠爾」詠（C歌）の題詞と誤る可能性が果たしてあるか、という点に疑義が存するのである。次には、「熟田津爾」の詠と内容的に何ら触れ合うところも無い「美枳多頭爾」詠の左註が、何の疑問をも抱かれること無くして、「熟田津爾」詠の題詞と考えられることが果たして在りうるか、という点に疑点が存するのである。

斯くして、筆者は、爾後の研究に多大の示唆を与えた説として尊重しつつも、全体的見地よりすれば、桑川氏説を否定するものである。

沢瀉氏説に対しては、既にその所説の(1)より(3)に至る箇条の内容についてはそれを支持しかねることを説いて来たのであるが、引き続きここでは沢瀉氏の所説の自余の箇条の内容につき検討することとする。その(4)にあつて、沢瀉氏は、「熟田津爾舟乗……」の詠（C歌）が「熟田津爾泊而……」の詠（「美枳多頭爾」詠）共々「齐明天皇御製」として『類聚歌林』に載せられていたであろう、と想定されるのであるが、その一方、氏は、(5)の箇条にあつては、「無論、万葉集原本の採録者は『類聚歌林』からではなく『額田王作』とあつた記録から（C歌Ⅱ1―8を）採つたのであるが、……」と述べておられるのである。これは一体どういうことであろうか。筆者は、固より、この時期の詠歌にあつては、製作されるも直ちに書記せられること無く、口頭で伝誦されるものの少なからざることを承知している。のみならず詠歌が個としての作者に帰属するよりは場の共有物としての意識が強かつたところより、何れかの場でそれを詠じた人の名と結ばれて詠歌が伝わることの少なからざることもまた承知している。併しながら、事は余人ならず天皇ご一人の御製の関わる問題である。C歌が真実沢瀉氏の言われるごとく齐明天皇の御製であり、何らかの根拠に基いて『類聚歌林』にも「齐明天皇御製」として載せられていたというのであれば、如何に高名の歌人と言う条、それが額田王の名と結ばれて伝えられることなどであろう筈もなからう。一方に「齐明天皇御製」との伝えを有した一方に「額田王作」との伝えの存する、C歌のその錯綜に解決を齎すの途は唯一つ、齐明天皇をしてその形式作者（製作依頼者）額田王をしてその実作者（代作者）と解することあるのみであろう。この点については、尚、本論第二節第(一)条を参看されたい。

かように、沢瀉氏説の(4)・(5)両箇条にも亦容認し難い条件が加わつて来るに至れば、仮令その『類聚歌林』の原形に対しての推定の

部分が桑川氏のそれよりも妥当性を有するものであるとしても、筆者としては、最終的にはこの沢瀉氏説を否定せざるをえぬのである。

そこで、最後の谷説の検討に移ることとする。谷氏の説かれる(1)の箇条は、一旦C歌(1-18)より目を移して、万葉集巻第一にあって『類聚歌林』を引用する左註者の、その引用の方針・態度を窺うに、左註者は、一首の製作事情を明らかに、強い欲求から、当の作歌とは別の、唯その事において(その製作事情において——註筆者)関連を有する『類聚歌林』所収歌に付されていた文を参考・引用・註記することが稀ではなかった、というものである。谷氏の得られたこの結論は如何なものであろうか——。細部については些か私見を挟む余地は存するものの、全体的には、谷氏の結論は筆者の容認しうるところである。いま、筆者は、些か私見を挟む余地の存することを言った。それは、以下の点に関してである。即ち、谷氏がもし万葉集巻第一(第一次撰部分)における左註者の註記の方針・態度を知ろうとするのであれば、何故に氏はその対象を『類聚歌林』よりの参考・引用・註記の場合に限定されたのか、という点についてである。その全体像を明確にした上で、『類聚歌林』よりの引用の方針・態度について語った方が、確実な結論を得られたに相違ないからである。そこで、私は、谷氏になり代わり、万葉集巻第一の第一次撰部分をその対象として、左註者の註記の方針・態度を窺うてみることにする。有斐閣刊『万葉集全注』(以下『全注』)第一巻にあつて、伊藤博氏は、万葉集巻第一の左註者につき、「その筆者は誰であるか不明である。ただし、万葉集の生い立ちを探っていくと、天平十七年(七四五)段階の伴家持たちであろうと推定される。」としておられるのであるが、実は、その中の一五・一九・二五・二六歌に対する左註の三例については、△旧本▽・△或本▽なる原資料に依拠せる、万葉集巻第一の編纂の経緯そのものの解説といった趣であり、私見によれば、万葉集巻第一第一次撰の編纂者自身の手になるものとも思われ、これを除去するならば、五・六・七・八・一〇・一一・一二・一七・一八・二〇・二二・二三・二四・二七・三四・三六・三九・四〇・四四・五〇・五二・五三各番歌に対する左註の計一四例がその検討の対象となるのである。そこで、これを註記の目的別に整理するならば、(1)製作の時期を明らかにするもの——二〇・二二・二七・三四・三六・三九・四〇・四四・五〇、(2)製作の時処を明らかにするもの——二三・二四、(3)製作の時期・作者の種姓スジョウを明らかにするもの——二二、(4)製作の時処・作者の種姓を明らかにするもの——五・六、(5)作者の誰人たるかを明らかにするもの——五二・五三、(6)作者についての異伝を記すもの——一〇・一二、(7)製作の時処・作者についての異伝を記すもの——七、(8)製作の時期及び事情・作者についての異伝を記すもの——一七・一八、(9)製作の時処及び事情・作者についての異伝を記すもの——八、以上のごときものとなる。この中、(5)については、

「作者未だ詳らかならず」という状況であつて、如何なる文献も引用されておらず、また、(1)〜(3)については、記・日本紀（何れも日本書紀を指す）を参考・引用しての左註であつて、当面の問題である、『類聚歌林』を参考・引用しての左註は、自余の(4)・(6)・(7)・(8)・(9)として掲げた計五例ということになる。即ち、万葉集巻第一の第一次撰部分の左註者における文献参考・引用に際しての方針は、先ず日本書紀を対象としてその疑点の解決を図り、それにより猶解決の得られぬ問題の存する場合は、引き続き『類聚歌林』を参考・引用する、というものであるようだ。さて、ここで、私は、谷氏の論に立ち戻り、前に(4)・(6)・(7)・(8)として掲げた、五〇六・一〇一・二・七・一七〇一八各番歌に付された左註を対象として、その『類聚歌林』を参考・引用する折の左註者の方針・態度を見極め、以て当面の課題たる(9)として掲げた八番歌の左註の本質を闡明するという、最終段階に移ることとする。

先ず、(4)——「讃岐国安益郡に幸しし時、軍王の山を見て作る歌」なる題詞に従う、五〇六番歌に付された左註の場合である。左註者は、長反歌製作の正確なる時処・その作者たる軍王の種姓を明らかにし、先ず、「舒明紀」を検索したのであるが、そこに題詞に記された八讃岐国行幸の記録及び軍王の種姓解明に資する記事を発見することをえず、偶々『類聚歌林』に収められていた舒明天皇の八伊予国温湯宮行幸時の某歌を発見したことから、「けだしこより便ち幸ししか。（天皇はこの伊予国から讃岐国へ行幸の駕を進められたのであろうか）」と推測し、その某歌に付されていた左註をここに引用しているのである。この五〇六番歌に付された左註の場合は、谷氏の説かれたごとく、そこに引用された『類聚歌林』所載の日本書紀・「一書」の文は二つながらこの五〇六番歌と内容的に何ら関わりが無いものであつたのだ。次いで、(6)——「中皇命、紀の温泉に往しし時の御歌」なる題詞に従う、一〇一・一二番歌に付された左註の場合であるが、左註者は、恐らくその「中皇命」の誰人たるかを究めんとして日本書紀を検索したが、それを明らかにする記録を発見しえず、次いで参看した『類聚歌林』の中にこの一〇一・一二番歌を「天皇御製歌」と伝える左註を発見し、作者についての異伝としてここに引用したもの、と思われる。更に、(7)——「額田王の歌」なる題詞に従う、七番歌に付された左註の場合である。左註者は、一首製作の時処を明らかにすべく、『類聚歌林』を検索した結果、この七番歌に「戊申の年比良の宮に幸すときの大御歌」とする「一書」に基づく左註在るを発見し、一首製作の時処と作者についての異伝としてここに記したもの、と思われる。それに続く「ただし、紀に曰はく、五年春正月己卯の朔の辛巳、天皇、紀の温湯より至ります。三月戊寅の朔、天皇吉野の宮に幸して肆宴す。庚辰の日、天皇近江の平の浦に幸すといへり。」は、『類聚歌林』の左註に載せるところの「比良の宮に幸す」なる記事が、恐らくは重祚以前の上

皇時代の御幸なるが故に、日本書紀に発見されなかったところから、左註者が斉明天皇の△平(比良)の浦行幸▽の記事を「斉明紀」に覚めたものであった、と思われる。谷氏は、この左註の在り、よう、に對して、「二書」の「戊申年幸ニ比良宮一大御歌」というからには、比良宮行幸の時に詠める歌であるべきなのに、七番歌は年経て詠める趣の追懷歌である」ということを理由として、「左註全文を、七番歌とは全く別の歌に就いて記されていた『類聚歌林』の註であり、それをそのまま引用したものと考えるのである。」とされるのであるが、本論第二節第(一)条に説いたごとく、一首は、戊申の年(大化四年〓六四九)の皇極上皇の比良宮御幸に際し、その出発に当たつてか或いは宇治の地においてか、亡き夫君たる田村皇太子(舒明天皇)と共に曾て遊んだ△宇治の京▽への追懷の情止み難き上皇の意を汲んで、傍らに侍した額田王の作した代作詠と想定されるところから、谷氏のその言説には服しかねるのである。「類聚歌林」にあつても、その「一書に戊申の年比良の宮に幸すときの大御歌」なる註記は、やはり七番歌に付されていたもの、と考えるべきものであつた。最後に、(8)——「額田王の近江国に下りし時作る歌(以下略)」なる題詞に従う、一七〇一八番歌に付された左註の場合である。左註者は、長反歌二首製作の正確なる時処・事情を知るべく「類聚歌林」を検索し、そこに「都を近江国に遷す時に三輪山を御覽す御歌そ。」なる左註を発見し、長反歌製作の事情・作者についての異伝としてここに引用したものであるが、その左註は、「類聚歌林」にあつても一七〇一八番歌に付されていたものに相違無いこと、言を俟たない。

以上、筆者の整理した(4)・(6)・(7)・(8)に属する五〇六・一〇〇一・一七〇一八各番歌につき、谷氏説の成立の可否を問わんとして、万葉集巻第一左註者の「類聚歌林」参考・引用の方針・態度を検し来つたのであるが、その結果、筆者としては、自余については問題を存せぬものの(7)に属する七番歌に付された左註におけるその場合については、遺憾ながら谷氏の論ずるところには従いえず、との結論を得るに至つたのである。最終的にはそういうことであるが、併しながら猶、私は、五〇六番歌の左註につき谷氏の言われたところ、即ち、万葉集巻第一の左註者にあつては、一首の製作事情を明らかにめんと強い欲求から、当の作歌とは別の、唯その製作事情において関連を有する「類聚歌林」所収歌に付されていた註記を参考・引用するという方針・態度が存したという指摘、それについては、重要な指摘として重ねてここに特記しておきたいと思う。

さて、谷氏の所説についての検討を続けるのであるが、ここでは、相互に深く関わり合う内容であるので、(2)・(3)・(4)各箇条の内容を一括して検討・考察することとしたい。氏の説かれるところを稍詳細に紹介すれば、以下のごとき内容である。即ち、(1)の箇条で明

らかにした万葉集巻第一の左註者の註記の方針・態度は、当面の考察の対象たるC歌（1-18）の場合とて例外であろう筈は無く、一首製作の正確な時処を明らかにする目的から『類聚歌林』を検索し、本来は「伊与国風土記」にも引かれた「美杵多頭尔」の詠に憶良の付した左註をC歌の左註として参考・引用したものであろう、と思われる。而して、その『類聚歌林』における「美杵多頭尔」詠に付された左註の内容とは、「飛鳥岡本宮に天の下知らしめしし天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、……すなはちこの歌は天皇の御製^{ウツ}そ。」であったと想像される。そうでなければ、左註は文意が通じ難い。と言うのは、これも重んずべき資料に拠った万葉集の左註者が、この憶良の文を証として、少しも「哀傷」の情の認められぬC歌に対して、「すなはちこの歌は天皇の御製そ。」と断定的な註を添える理由など全く認められぬからである。同時にまた、C歌の左註者は、『類聚歌林』の同所に額田王の作品がC歌の他にも四首載っていることを重視して、「ただし、額田王の歌は別に四首あり。」と註記したのである、ということになる。この点如何——。先ず、その冒頭に説かれるところ、即ち、万葉集巻第一の左註者が、C歌製作の正確な時処を明らかにするために『類聚歌林』を検索し、C歌とは別の斉明天皇の御製なる「美杵多頭尔」詠に憶良の付した左註をC歌の左註として参考・引用したものであろうとされた点、その点に關しては、何ら異とするところは無い。併しながら、それに続く部分、即ち、『類聚歌林』における「美杵多頭尔」詠の左註が、「飛鳥岡本宮に天の下知らしめしし天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、」より「すなはちこの歌は天皇の御製そ。」に至るその全体であった、という谷氏の見解については、首肯することをえぬのである。谷氏の立場は、前記せるがごとく、さように考えねば万葉集巻第一の左註者が少しも「哀傷」の情の認められぬC歌に対し「すなはちこの歌は天皇の御製そ。」と断定する必然性は存せぬ、という考えに導かれてのものであったが、谷氏のその疑念に対しては、筆者の見解を後に示すこととして、何れにもせよ、本論第二節第(三)条の冒頭に筆者の記したがごとく、『類聚歌林』よりの引用が、「右、山上憶良大夫の『類聚歌林』を検ふるに曰はく、……といへり。」なる形式に括られているもの、と考えずに、「右、山上憶良大夫の『類聚歌林』を検ふるに曰はく、……。」という形式で記されていた、と考える谷氏の見解は、余りに表現法の常套に悖^{そむ}る見解であった、ということのみは表明しておかねばなるまい。また、谷氏がその末尾に説かれたところ、即ち、C歌左註者の「ただし、額田王の歌は別に四首あり。」と記したその内容を、『類聚歌林』の同所に額田王の作品がC歌の他にも四首載っていることを重視し」ての註記、と考えられた点については、『類聚歌林』の同所（「美杵多頭尔」の詠及びその左註に続く部分）に額田王の作品のC歌ではなく、それ以外の詠四首が載っていたことについての註記とも見うる、という私見を申し

添えておくことにしよう。

漸くにして、C歌左註についての私見を開陳する段階に立ち至った。筆者の見解を讀者諸氏に明瞭に伝えんが為に、私も亦、桑川氏以下の三氏のそれに倣つて、C歌左註者の参考とした、『類聚歌林』の原形を想像することから始めたい。私の想像する『類聚歌林』の原形は次のとき内容である。

美枳多頭尔 波弓丁見礼婆_{云々}

飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑、……所以因製ニ歌詠一為ニ之哀傷一也。

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

○○○○○……

右、額田王歌焉。

筆者の想像する『類聚歌林』の原形にあつて、桑川氏以下の三氏のそれと大きく異なる点は、『類聚歌林』中に当面の考察の対象たるC歌自体が載せられていなかったもの、と考える点である。明治書院刊『和歌文学大辞典(昭和三十七年版)』の小島憲之氏による『類聚歌林』に対する解説、即ち「歌集。山上憶良編。はやく散佚したが、万葉集中に左注として引用され、その倂を想像できる。(中略)成立年代については、集中の本書の引用文に『日本書紀』や『伊予国風土記』に似た所伝、書紀以前の書と思われる一書があること、また、文中に△御宇天皇▽△馭宇天皇▽の語が見えることから、憶良が本書編纂のための便宜を得たと思われる、東宮(後の聖武天皇)近侍の頃、すなわち、養老五年(七二二)△神龜三年(七二六)までの間が最有力と考えられる。その編纂は、後に万葉集巻一、二の旧本となつた歌の編纂と平行的に行われたものとも考えられ、採録歌の時代範囲もそれに同じく、また宮廷歌人の作歌の収集が中心をなしている。その引くところでは、磐姫皇后の歌が最も古く、大宝元年(七〇一)が最も新しい。採録歌数は約三百数十首から五百数十首△吉田幸一説▽。(以下略)」のごときを前提とし、その採録歌数の多さに加え、当面の考察の対象たるC歌が人口に膾炙した名歌であることを併せ考えるとところから、このC歌がそもそも『類聚歌林』に載せられていなかったとする私見は如何にも奇を衒つた

珍説、と見られる向きも多かるうが、併しながら、舒明朝の製作ではなく持統・文武朝の製作と想定されるものであるとしても、猶『類聚歌林』編纂以前には製作されていたことの明らかな、△軍王見山作歌▽長反歌二首（1156）の場合にも、それに付された万葉集の左註の内容に照らして、『類聚歌林』に収められていなかったことは明白であり、万葉集巻第一の第一次撰における左註者の傾向よりして必ずや『類聚歌林』を参看するに相違ない、△天皇御製歌▽（一）・△天皇望国時御製歌▽（二）・△宇智野遊獵時献歌▽（三）・△紀温泉幸時額田王作歌▽（B歌Ⅱ九）・△中大兄三山歌▽（一三）・△春秋競憐歌▽（一六）・△蒲生野遊獵時贈答歌▽（二〇）・△吹芟刀自作歌▽（二二）・△麻統王流於伊良虞嶋之時歌▽（二三）・△天皇御製歌・同或本歌▽（二五）・△天皇御製歌▽（二八）・△近江荒都歌▽（二九）・△紀伊国幸時川島皇子御作歌▽（三四）・△越勢能山時作歌▽（三五）・△吉野宮幸時人麻呂作歌▽（三六）・△伊勢国幸時歌群▽（四〇）・△安騎野遊獵時歌群▽（四五）・△藤原宮役民作歌▽（五〇）・△志貴皇子御作歌▽（五一）・△藤原宮御井歌▽（五二）について、『類聚歌林』よりの註記の参考・引用が全く見られぬのは何故であろう。これらの全てが『類聚歌林』に収載せられ左註を有し、而も、その左註の全てが万葉集巻第一の第一次撰部分の左註者によって参考・引用するに足らぬものとして打ち捨てられた、と考えるのは常軌を逸しており、『正倉院文書』の「写私雑書帳」天平勝宝三年（七五二）条の「歌林七巻」の記事に鑑みて、少なくともこの年迄は散佚を免れていたと思われる『類聚歌林』であったことを念頭に置くと、天平十七年（七四五）段階の家持らと推定される万葉集巻第一の左註者の目にした『類聚歌林』中には、前記した諸歌の中のかかりの部分が収録されていなかったらしいことが想定されるのである。当面するC歌が『類聚歌林』に載せられていなかったのではないか、とする私見も強ち啗^{ツラ}わるべきものではなかった、と言えようか。

上記せるところが幸いにして読者諸氏により承認せられるものであるならば、筆者の考えは、次のように展開されることになる。即ち、(1)「額田王歌」なる題詞に従い万葉集巻第一に収められるC歌に対して、左註者は、その製作の正確なる時処・事情を知らんとし、『類聚歌林』を参看したが、『歌林』にはC歌は収載されていなかった。(2)そこで、左註者は、「熟田津」なる地名を手掛りとして『歌林』を博搜し、斉明天皇の御製歌なる「美枳多頭尔」詠を発見し、そこに付されていた左註を、谷氏の説かれ筆者の確認したがごとく、△軍王見山作歌▽（五）の場合同様に、C歌製作の時処を知らしめる恰好の資料として、C歌の左註として参考・引用したものである。(3)『歌林』の「美枳多頭尔」詠に付された左註の内容は、当然、「飛鳥岡本」宮に天の下知らしめしし天皇の元年己丑、……所以^{ソレ}

に歌詠を製^ツりて哀傷したまふ。」であり、そこに伝えるところはその内容よりしてC歌のそれと重なり合うものではないのだが、C歌の左註者は、伊予国の「美^ミ枳^キ多^タ頭^ツ」における「船泊て」を詠じた一首が斉明天皇の御製であるとする「歌林」左註に引かれて、同じき伊予国の「熟^{ニキ}田^タ津^ツ」における「船乗り」を詠じたC歌も亦斉明天皇の御製ならんかと推断し、その左註の末尾に、「すなはちこの歌は天皇の御製そ。」という一言を添えることになったもの、と推察される。慥^{タツ}かに、この左註末尾に添えられた作者推断の一言は迂闊^{ウゴン}の譏^ツりを免れえぬところである。併しながら、作者誤認の過ちを犯した、C歌左註者の為に強いて苦しい弁護をなすとならば、そこには、「類聚歌林」がC歌を載せることなく、而も、斉明天皇御製たる「美枳多頭尔」の詠に続いて、「右、額田王の歌そ。」の左註を伴い、C歌を含まぬ四首の額田王作歌を載せていた、という特殊な事情を考慮すべきであろう、ということである。C歌左註者は、斉明天皇御製としてC歌を位置づけたものの、やはり、万葉集巻第一にC歌が額田王の作歌として記されていることへの拘りを捨て切れなかった模様で、「歌林」にはC歌ではなくそれ以外の四首が額田王の作歌として載せられている、という事実を些^シか戸惑^コい、氣味^{キミ}に、「ただし、額田王の歌は別に四首あり。」と最後に言い添えたものであつたらう。

* * *

これを以て、涯^ハしも無く続けられたC歌(1-18)の題詞・左註の錯綜した関係についての考察に終止符を打つ。私見によれば、C歌を「斉明天皇御製」として伝えた如何なる資料も本来存しなかったものであり、C歌は、万葉集巻第一の編纂者の依拠した資料に記されていたがごとく、「額田王の歌」に相違無いものであつた。而も、それは、万葉集巻第一・八雑歌部^(四)の特質^(四)に鑑みても、額田王の私的な詠にはあらずして、斉明天皇の(否、寧ろ実権を掌握する皇太子・中大兄皇子の、と言うべきか)の製作命令を受けて作された、公の要請に従う代作詠であつた、と思われる。一首製作の時期は、C歌左註に記され「斉明紀」もそれを裏書きする、百濟救援の為に遣わされた軍船が伊予国熟田津の泊^トりに繫泊した、斉明七年(六六一)の「春正月丁酉の朔の庚戌(二月十四日)」以後の、「春正月丁酉の朔の辛亥(一月十五日)」・「春二月丁卯の朔の辛巳(二月十五日)」・「春三月丙申の朔の庚戌(三月十五日)」の中の何れかの日と想定され(この点尚後述)、一首製作の地は、言う迄も無く、伊予国熟田津の泊りである。

筆者の如上の言中の、C歌をして斉明天皇の（否、寧ろ皇太子・中大兄皇子の）製作命令に依えての額田王の代作詠と称した部分につき、平時の行幸ならざる征旅の場に女人の在ることを異とする向きも存しようが、「斉明紀」によれば、船団の熟田津繫泊に先立つ「春正月の丁酉の朔の甲辰（二月八日）」のこととして、「御船、大伯海（現岡山県邑久郡の海・小豆島の北方に当たる。——註筆者）に到る。時に大田姫皇女、女を産む。仍りて大伯皇女と曰ふ。」なる記事を書載しているのであり、かような例に鑑みても、征旅とは言え、否、寧ろ征旅なるが故にと称すべきか、少なくとも軍船の筑紫進発以前にあつては、女人を帯同しての征旅であつたことが知られるのである。前記せる大田皇女の例などを見れば、単に軍旅の慰めの為に家妻を伴うたもの、とも思われるのであるが、筆者としては、「斉明紀」に「三月の丙申の朔庚申（三月二十五日）に、御船、還りて娜大津（現福岡市の博多港——註筆者）に至る。」とあつて、軍船が二月にも及ぶ長期に亘りこの熟田津に繫留せられていたことの意味（この点尚後述）、また、この後も、額田王が△近江遷都時作歌（D・E歌Ⅰ一七・一八）・△天智殯宮挽歌（I歌Ⅱ2一五一）等の呪歌を作していることの意味（この点尚それぞれの条で詳述）、それを併せ考えるとき、征旅としてのこの行幸に従うた額田王の立場には、折口信夫氏の説明された、「神武紀」その他に散見する、△女軍——多く巫術・呪術を以て戦場に臨み、敵軍を守る精霊を抑圧する者——的な性格が存したものであらう、と考えるものである。

さて、C歌は詠ずる、「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」と——。この「船乗り」に関しては、従来、次なる二説が広く行われている。即ち、その一は△船遊び説であり、他は△解纜説である。前説の代表は花田比露思氏でありまた土屋文明氏である。花田氏謂わく、「昔日猶存之物を御覧ぜんとて、一夜月明に乗じて、そこらあたりを舟遊せんと思ほし立たれ（以下略）」と——。これは、C歌左註に記す「天皇、昔日より猶ほし存れる物を御覧し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり。」に引かれての見解であるが、月明とは言う条、危険の伴う夜間に殊更船遊びをなすというのも不自然であり、先ず第一、前述せるがごとく、花田氏の拠とされたこの左註は、本来C歌の製作の事情を伝えるものではなく、今は伝わらぬ「美柢多頭尔」の詠に付されていたものであることを思えば、花田説は容認し難いものである。土屋氏の所説は以下のごとき内容である。即ち、「左注に見える如く、斉明天皇の七年春正月新羅征討のため御船が西に赴かれ、途中伊予の熟田津に停泊され、石湯行宮に居られた。熟田津には正月十四日に到着され、三月二十五日筑前の長津（博多）に到着されたのであるから、その出発（二十日前後か）まで満二ヶ月程石湯

行宮に駐まられたものと考へられる。此の歌は従つて正月二月三月のいつれかの十六日以後位(土屋氏は「語釈」の項に、「月の出を持つのであるから、太陰暦の十六日以後であることが知れる。」と説いておられる。——註筆者)に作られたものと考へられる。船乗を筑前へ向け出船のためと考へるか、又は其の前の一行事と考へるならば、それは三月十六日以後二十日以前あたりに行はれたものと見るべきであらう。此の月の三月十六日は太陽暦の四月二十三日にあたる。氣候の大概が想像出来、その船遊に好適の時であるのも知り得よう。(以下略) (以下特別に断わり無き引用文中の傍点筆者) というものである。氏の立場は、傍点を施した部分に明らかなごとく、次に語る「解纜説」へ、更には、最後に示す「船乗神事説」にも心動く様子を見せつつも、最後に「船遊び説」を主張することになるのだが、後述するごとく、造船技術・航海術の未熟な段階にとどまる当時にあつては、緊急の事態でも無い限り、先ずは殊更に夜間船を漕ぎ出すことなど考えられぬことであり、その点よりして、土屋説も亦否定せざるをえぬのである。後説、即ち「筑紫を目指しての」解纜説は、岸本由豆流『万葉集攷証』以来広く行われているのであるが、ここでは、この立場に立つ諸説中の最も詳細にそれを説いておられる、沢瀉久孝氏『注釈』の所説を整理して箇条的に示すこととする。即ち、(1)「月待てば」の歌句について、山田孝雄氏『万葉集講義』は、「月を待つとは月の満つるを待つことなり。月と潮とは関係深きものにして満月と新月の時に満潮となり、上弦下弦に干潮となるものなれば、満月を待つは即ち満潮を待つこととなるなり。」とされるが、一つには、そう考えると月も潮も眼前の景ではなくなり、為にこの歌の生彩が消されてしまうこと、二つには、万葉集にあつては、月や潮を待つとは眼前に見る月であり潮であることを通例とする、三つには、大潮と言つてもその潮高の差は僅かで、暦日の大潮を待つて船を出すというのは船は月に二度しか出ないということになる、との三つの理由から、それには従えない。(2)夜間に出帆することは無いとの説もあるが、巻第十五・三五九九番歌のごとき例もあり、而も、この場合は、宵月ではなく有明の月であつて、暁に近い時刻であるから、何ら不都合は無い。(3)船出の日時は、この年の正月で満潮と月の出の一致する日時ということから、二十二・三日頃の午前二・三時頃、と推定される。——以上のように説かれるのである。沢瀉氏説の中、(1)については、山田氏『講義』の内容を筆者としては後に別の角度から採り上げることになるものの、この時点では、額面通りに見た「講義」説を批判する、沢瀉氏の立場は首肯しうるもの、としておこう。氏の言われるごとく、月も潮も眼前の景でなければならぬのである。(2)については、併しながら、これを否定しなければならぬ。この点に関しては、谷馨氏『額田王』の論中に語られるがごとく、この当時は、海人の生業の為か或いは差し迫った所用ならざる限りは、夜間の航海は避けられるのを

常としている。止むを得ざるの夜航の場合も、不安に脅え心細さを託つ詠は集中に少なくないのである。沢瀉氏が例として挙げられた、巻第十五・三五九九番歌は、〈遣新羅使人歌群〉（15―三五七八―三七二二）中の一首であるが、同歌群中には、「われのみや夜船は漕ぐと思へれば沖辺の方に楫の音すなり」（三六二四）のごとき、夜航の不安の滲み出た詠も多いのである。ところで、私は、一旦は読者諸氏を不可解に導く事柄をここに記さねばならぬ。実は、前に、夜航の通常は在り難いこと、とされた谷氏が、その論の半ばより俄かに屈折を見せ、夜間航海は月明と満潮を利用する大船の出航もしくは止むを得ぬ目的・使命を有する場合に行われたもの、と条件を付け、このC歌の場合も、筑紫を目指す船団の解纜に際しての詠と考えるべきである、との結論を出しておられるのである。かような谷説の登場により、一転して沢瀉氏説の成立の蓋然性は高まったかの感がある。併しながら、筆者の立場は、沢瀉氏説の(2)の箇条、そして、それを支持する谷氏説、の両者を否定するという点において些かも変わるものではない。何となれば、当時の大船の出航は常に夜間の満潮時に限られたとは如何にしても信じ難いということ、それを第一の理由とする。大船ならば扁舟に比して水面下に在る部分も大である。とすれば、満潮は一日に二度存するのであるから、如何に月明在りと雖も水面下の状況の定かに監視し難い夜間の満潮時を殊更出航の時として選ぶ必要は無い、ということである。水面下の状況の完全に確認出来る昼間の満潮時こそ、大船の出航にとつては最適の条件である筈だ。それが、何としても月明を頼りとして夜間の満潮時に船団を進発させねばならなかったというのであれば、それは極めて差し迫った緊急の事態が出来た、ということではなければならぬ筈だ。ところが、そうした緊急事態の発生を告げる如何なる記録も発見出来ぬのである。これが、沢瀉・谷両氏説に従いえない第二の理由である。この問題は、沢瀉氏説の(3)の内容とも深く関わってくる。沢瀉氏は、船団の筑紫を目差しての熟田津出航の日時を一月二十二・三日の午前二・三時のことと想定される（谷氏は、それを翌二月の満月の夜、とされる）のである。ところが、「斉明紀」によれば、船団の娜^ナ大津^{オホツ}（現福岡市博多港）への入港は、「三月の丙申の朔庚申に、御船、還りて娜大津に至る。」ということになる。沢瀉氏の出航想定日よりすれば二箇月余、谷氏の出航想定日よりすれば一箇月余、船団は何処を漂流していたというのか。谷氏のごとく、「還りて」の部分を「還」とある以上は、如何に解するとも、御船が娜大津^{ナオホツ}よりも遠に遠い地点に到っていたことを示すであろう。」と考える立場も存するのだが、これは全く不可解としか言いようもなく、我々は、やはり、『日本書紀通釈』の説くがごとく、「ここは其志し給ふ方筑紫なれば。其方に還り給ふよしなるへし。」との立場に即して、船団は、その本来の征旅という目的よりすれば寄り道に当たる熟田津に正月十四日より二箇月の余繋泊し、三月二十日

過ぎに漸く解纜し、本来の航路に戻って娜、大津に入港したもの、と解せねばなるまい。「船乗り」を \wedge 筑紫を目指しての(解纜 \vee とする為には、何故に船団は熱田津に二箇月の余繋泊せられていたのか、その点を何としても解決せねばならぬのである。この点を種々の観点より考えてみることにしよう。想像される理由の第一のものは、老いたる斉明天皇の入湯療養の為かと見る立場である。六八歳という身は不自由な船旅から疲労を呼び、病魔を誘ったものである。この地で、一月十四日到着後、三月二十五日の間際まで十分に休養し、快気の下、娜、大津へと船出したのであろう。——これが、森脇説の大概であるが、どうも釈然としない。三月二十五日に娜、大津へ到着の後も、差し迫った動きは無いところよりすれば、老齡の女帝のご体調については難破出港以前から予測の付くところであり、更には程無くご出産の予想される大田、皇女の事を併せ考えれば、殊更に氣候不順なる正月六日の難波進発の必要も無かつたのである。結果としては、老女帝も幾度が入湯されたことであろうが、そのような偶然の問題がこの熱田津長期滞留の真因であるとは、如何にしても筆者には思われぬのである。舒明・斉明両帝の度重なる伊予国熱田津行幸の真因については、後述することとしたい。諸家に説在る訳ではないが、敢て筆者がその理由の二を想定すれば、そこには、「備中国風土記」逸文に邇磨郷のこととして伝えるがごとき、現地における軍士徴用のことが存したのではないか、という立場である。今日より考えれば、驚くべき泥縄式ではあるが皇太子・中大兄皇子の召しに応えて、二万人の軍士が集まった、と風土記は伝えているのである。同様なることが伊予国にあつても為された可能性は皆無ではないが、その場合でも、邇磨郷にあつては短時日の中に二万人もの軍士が召集せられたのに、伊予国にあつてはそれが二箇月余の長期に亘った、と考えるのは何とも不可解なことである。引き続き、敢て筆者の想像するその理由の三は、備中国で二万人の軍士を徴用したが為に、今度はその軍士たちを百済の戦場へ輸送する渡海用の軍船の調達に要が存したのではないか、とする立場である。併しながら、これも、そうした軍船の調達は筑紫にあつて進められてもよい筈であつて、これ亦否定されるところである。

征旅の軍船が何故に二箇月の余も伊予国熱田津の地に繋留せられねばならなかつたのか。更には、軍船の難波出港が何故に正月六日であり、熱田津の入港が正月十四日でなければならなかつたのか。そして更にまた、軍船の熱田津出港が三月二十日過ぎであり、大津入港が三月二十五日でなければならなかつたのか。——論は愈その最終の段階に差し掛かってきたようだ。前に、私は、舒明・斉明両帝の度重なる伊予国熱田津行幸の真因について考慮せねばならぬ、と記した。その真因について深く思いを至すこと無きところより、安易なる入湯遊樂・入湯加療の説も出来するのである。それ恰も、そのご治世中、日本書紀に記されただけでも三〇回を超える吉野行

幸を重ねられた持統天皇に対し、亡き夫君・天武天皇との想い出を辿る謂わば感傷旅行、また、入湯加療の爲の行幸、と見做すその態度と同様なる単純さである。舒明・斉明両帝の度重なる伊予国熟田津の石湯行宮行幸の真因、延いては、当面する、斉明七年次の征旅の途次の二箇月に余る熟田津長期滞留の真因、それを明らかにする筆者の、忽然として想起するところは、「允恭記」また「允恭紀」に載せる、木梨輕太子・輕大郎女（紀は、木梨輕太子・輕大娘皇女）の近親相姦の伝えである。禁を犯し同母の兄妹にして接した二人は、捕えられ、「故、其の輕ノ太子は、伊余の湯に流しき。」（記）・「則ち大娘皇女を伊余に移す。」（紀）と伝えられる。一体、我が国の刑罰たる△流罪▽について考えてみるに、そこには、本来、罪に対する制裁という意識は甚だ稀薄であり、禁忌を破ることによる生じた穢れなる罪を禊ぎを行うことにより、消除して清浄なる状態に立ち戻すという、信仰的意識が甚だ濃厚なるものであったのだ。従つて、その配流の地は悉く聖なる禊ぎの靈地に限られていたのだ。輕太子または輕大郎女の流された、伊予国なる熟田津の地は、正しくさような禊ぎの靈地であつたのだ。禊ぎの行われる聖域としては、常世浪寄せる海辺に湯の湧く地が格段の条件を具えているもの、と思われていたのである。その海辺の禊ぎの靈地における禊ぎのことは、月齢に伴い大潮の差す陰暦一日もしくは十五日、満月の有する神秘感よりして、取り分けて十五日、に行われるものであったことが予想される。柳田国男氏編の角川書店刊『分類祭祀習俗語彙』を繙くに、△シオクミ▽と呼ばれる、海岸へ出て汲んだ潮水を神社の境内に撒きまた自らの身体や家の神々を清める風（三重県北牟婁郡須賀利村△現尾鷲市▽・香川県手島など）は月の一日・十五日・二十八日に行われ、△シオイタゴ▽と呼ばれる同様なる風（鹿児島県黒島）は月の一日・十五日に行われ、更には、△シオテタゴ▽と呼ばれる同然の風（高知県室戸市）は月の一日・十五日・二十八日に行われるものである、その一日・十五日・二十八日という日付の限定は、大潮に対する神聖観の表れ、と解されるものである。さて、征旅の船団は、熟田津の聖地にあつて禊ぎの神事を行うべく、その神事を行う日正月十五日より逆算して、「春正月丁酉の朔の壬寅（六日）」という日に難波より出港したものと思われるのである。熟田津におけるその禊ぎの神事は、満月の夜聖なる水域に漕ぎ出した船の上で行われたのである。これを夜間に行うのは祭祀なるが故の必然に従うものである。日の出より日没に至る時間帯は人間の爲のもの、神を祀る時間帯は夜間に限られたのが古代の信仰における常態である。さればこそ、禊ぎの神事を齋行する額田王を乗せて、船は満月の夜の海へ今まさに漕ぎ出さんとしているのである。「月待てば（月も適ひぬ）潮も適ひぬ今は漕ぎ出でな——」一首に漲る緊張感、神事を控えての額田王の緊張感に他ならぬ。「船乗り」とは、単なる△船遊び▽や△解纜▽を指すものではなく、折口信夫氏

の先ず指摘^(二)し、高崎正秀先生の祖述^(二)された、「垂仁記・紀」に伝える、本牟智和氣王(紀は普津別命)の倭の市師池・輕池における
 △舟の遊び▽ (後の△船御遊▽のごときもの) と相似た禊ぎの神事であったのだ。その神事は、或いは、正月十五日のそれにとどまら
 ず、二月・三月の十五日の夜にも重ねて齋行されたものであったかも知れぬ。

ともあれ、このC歌(1-18)は、その家系よりして禊ぎのを中心とする呪性に恵まれていた額田王(この点については、尚、
 後に詳述する)の、謂わば△呪歌の精▽としての誕生を意味する、その意味において重い意味を有する一首であったと言える。時に
 額田王の年齢は三〇もしくは三一歳であった、と想定される。

(未完)

註

- 一 「齋明天皇の御製」(『万葉歌人の誕生』所収)
- 二 「八番歌の左註」(『額田王』所収)
- 三 稻岡耕二氏「軍王作歌の論——『遠神』『大夫』の意識を中心に——」(『国語と国文学』第五十巻第五号所収)
- 四 拙稿「△人麻呂作歌▽の世界(一)——伊勢国幸時留京作歌の周辺」(『万葉集作歌とその場合△正篇▽——人麻呂攷序説』所収)の第二条参照。
- 五 愛媛県松山市古三津町とする説、及び、同市和氣町・堀江町近辺とする説、があり、△熟田津▽の位置は確定していない。
- 六 「大倭宮廷の癩業期」(『折口信夫全集』第十六巻所収)その他。
- 七 「万葉集私解」
- 八 「万葉集私注」第一巻
- 九 「額田王論序説」(『額田王』所収)
- 一〇 森脇一夫氏「熟田津の月」(『語文』第三十九輯所収)
- 一一 「額田女王」(『折口信夫全集』第九巻所収)・「賀茂神——古事記は偽書か(三)——」(『折口信夫全集』ノート編第三巻所収)その他。
- 一二 「小集集考」・「柿本人麿終焉歌とその周辺」(『文学以前』所収)

(本学教授)